第三号：第百三十三首〜第百四十九首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

「試す」とは、辞書的にいえば「物事の良否・真偽や能力の程度などを実際に調べ確かめる」ことであるが、たとえば、レコードを買う前に試聴したり、惣菜を買う前に試食するように、それは本格的な行為（ここでは購買）に先立ってその行為の意義を確証するためのメタ行為（行為のための行為）といえる。購買というある意味不可逆的な行為では、それを自分で上手に正当化できないと心的なストレスが大きくなるので、我々はそのリスクを避けるために購買に先立ってまず「試す」のである。

「おふでさき」は「何事も自由自在に守護するというこの試しは、ぢば以外のところでは決してしない」（三号 133）と詠っている。ここでの「この試し」もやはりメタ行為であるので、何らかの信仰的な行為の意義を確証しようとしている。つまり、「何事も自由自在に守護する」ことが試されたなら、信仰的な行為の意義も確証されるのである。

さて、この歌では、まずその「試し」という予備的な行為がぢばで為されることが説かれている。例えば、安産の許しである「をびや許し」の場合では、教祖は「をびや許し」を与える前に、「をびやためし」といって自らのお産に際して親神が「何事も自由自在に守護する」ことを証された。そして次に娘のおはるの初産で初めて「をびや許し」を与えたが、その際も「何でも彼でも、内からためしして見せるで」と「ためし」という言葉を使って、おはるの場合でも教祖のときと同じように親神が働いていることを明らかにされた。そして、清水ゆきという近隣の人をはじめ、その後今日まで慕い寄る多くの女性に「をびや許し」を与えている。

また、ぢばを確定するときも同様に、教祖はまず自ら行為している。教祖は、掃き清められた庭をまず自ら歩き、立ち止まった場所に印を付けられた。それから周囲の人々に目隠しをさせて同じように歩かせられ、どの人も最初に教祖が印した場所に立ち止まることを経験させて、ぢばの不思議さを体感させられた。このようにぢばで「試し」が為されるというのは、人々の信仰に先立ってまずぢばにおいて教祖や周囲の人々がその行為を遂行していることを意味し、ぢばそれ自体も「試されつつ」定められたのであった。

「試し」という信仰に先立つ予備的な行為は、信仰する心を作る機会であり、信仰が内容を伴った信仰となるための準備なのである。そして、その予備的な行為はぢばにおいて為されなければならない。それは元初まりの話に関連する。というのも、ぢばは人間を創った場所であり、教祖の魂はぢばに人間を産み下ろされた母親の魂である。つまり、ぢばも教祖も、人間の存在に先立って存在していなければならず、この生成の順序こそが「試し」がぢばにおいて為されなければならないことの本来的な意味であろう。我々の今日の信仰の営為は、ぢばにおいて「試された」行為であり、その意味で、ぢば／教祖の「試し」は我々の信仰に先立つのである。

そして、次の歌では「今までも試しと言って説いてきたけど、もうこの度は試すのも最後にする」（三号 134）と詠って、いよいよ「試し」というメタ行為ではなく、我々自身が実際に信仰を遂行する段階に来ていることを示されている。先ほどの例でいえば、教祖の「をびやためし」は済んだから、いよいよ人々に「をびや許し」を与えるということである。

さて、この段階において「おふでさき」は人々に課題を与える。それは、「何事につけてもこの世界は神の身体である、だんだんと思案してみよ」（三号 135）と「世界」についての思案である。続けて「この度は神が表へ出ているから、すべての事を皆教える」（三号 136）、「各々の身体が親神からの借り物であることを、知らないままでは何も分からない」（三号 137）、「考えてみよ、病といってもそういうものはなくて、身体の不調を通して神がこの道を教えて、心を変えるように意見しているのだ」（三号 138）と諭している。

親神が何事も自由自在に守護するのか否かを試すということは、病という事態においては、この身体が親神からの借り物であることの確証を得るということである。言い換えれば、「各々の身体が親神からの借り物であることを、知らないままでは何も分からない」と詠われているように、我が身が借り物であると納得できてはじめて本来的な意味での信仰が始まるのであろう。言うなれば、病とは、次の歌で「ちょっと目が悪い、できものがある、のぼせている、痛みがある、というのは神のてびきである」（三号 139）と詠われているように、親神が人間を信仰へと導く一つの手引きである。

続いて「おふでさき」は、「今までは高い山と言っても、用木が見えたことはないけど」（三号 140）、「この先は高山にてもだんだんと用木を見出す準備をする」（三号 141）と「用木」という言葉で神の用事に使う人々について述べ、「すべての人を救ける準備をするから、上に立つ人も下にいる人もその心を共に勇める」（三号 142）、「日々世界中の人の心が勇むなら、それに応じて作物も実り豊かになる」（三号 143）と貴賤の差なくすべての人の心に勇気を与え、人間のその勇んだ心というものが観念的な話ではなく物質的な恵みにも通じることを詠われている。さらに、「どんな事でもたすけたい一筋であるから、争いの根を早く切りたい」（三号 144）と争いの根本原因を取り除きたい気持ちを吐露され、その原因とは人々の心のほこりであることから「今の道はほこりだらけであるから、箒をもって掃除をせよ」（三号 145）、「あとには道は広くてチリもなく、幾人でも連れて通れ」（三号 146）と詠われている。

最後に、第百四十七首の冒頭は「二二の二の五つ」という数字で始まるが、『注釈』によれば、これは「明治七年二月二十二日の夜五つ刻」を示しており、それをふまえると、「二十二日の五つ刻に話しかけて、すべての根本原因をみな説いて聞かせる」（三号 147）となり、続けて「神職・僧侶の説教を聞いても、真の神の話と聞き比べてよく考えてみよ」（三号 148）、「日々神の話を順々と聞いて心楽しみにしてくれ、その話こそ救けの教えとして伝えるべきものである」（三号 149）と他の話に惑わされることなく神の話に耳を傾けるようにと諭されている。